田中四郎氏の追想録

久　琢　磨

終戦の年の春、太陽産業から出征し、不幸にも北鮮清津郊外でソ連軍と戦い、終戦の詔勅を知らずに悲愴な戦死をとげた田中四郎君の「追想記」が今般、有斐閣という書房から刊行された。本書の内容は、

「第一部」生い立ちから出版文協入りまで

「第二部」出版文協時代

「第三部」出版文協以後

「第四部」歌人としての田中四郎

この機会に五十有余年昔を顧み実の兄弟も及ばぬ彼との数奇な交友の一生を偲びたい。

彼は大正七年神戸高商に入学、同十一年卒業と同時に鈴木商店に入社、麦粉部に配され篠原名部長の下で西川政一君たちとともに、アメリカやカナダからの麦粉の輸入に従事していた。彼は神戸高商という名門出身の秀才で眉目秀麗、しかも在学時代からずっと須磨一の谷の金子邸に寓居、家庭教師をつとめ、金子翁のお覚えも極めて高いというので、早く社内外から将来鈴木の大幹部必定として嘱目されていた。しかも彼は神戸高商に入学と同時に学生相撲大会で優勝し更にこの秋催された毎日新聞主催第一回全国学生相撲大会で優勝し初代の学生相撲横綱の栄冠を得、文武兼備のアイドルとして社の青壮年層からは英雄視されていた。

しかし好事魔多しの譬のごとく、彼の人生行路も平坦ではなかった。昭和二年春、突如として起ったパニックで鈴木商店が破綻整理した時は、金子翁の身内と見做され、神戸高商閥に用いられず、金子翁と運命を共にせざるを得ない悲境に陥った。私は相撲の先輩石井光次郎氏に招かれて東京朝日新聞社に入り、彼も私の後を追って東京朝日に入ることになった。此処で又二人が相提携して働けるかとお互に喜んだ。しかしどのような事情が起きたかはさだかでないが、せん女史は彼を敢えて離さず、とうとうこの話は実現に到らなかった。彼はこの春から京都大学国文科に聴講生として入り国文学特に詩、短歌を専攻したらしい。其の後彼はせん女史の配慮で山陽電鉄に入り、営業課長として敏腕を振い、飯島幡司氏に招かれて栗本鉄工所に入り、取締役支配人に昇進した。其の飯島氏が日本出版文化協会を作るに際し招かれて常務理事営業局長として入り、多難な出版文化統制事業に従って苦労したらしい。飯島氏が筆禍引退の際、彼はこの事後処理を完全に済ませて辞職した。かくて多年引きづられていた飯島氏との袵を断ち切って金子翁の下に帰り太陽産業に復帰して一意鈴木復興のために尽砕した。出征戦死という最悪の惕がなかったら、太陽産業に頑張り、終戦後大活躍をなし、鈴木復興に努力し、今ごろは押しも押されもせぬ大実業家になっていたにちがいない。これを想い、彼を想うとも誠に惜しみても限りない、今はただ冥福を祈るのみ。

〈表紙説明〉

版画（岡村吉右衛門師作品）

種々の形のみで硯を彫る　石は地の髄　神の御業　石に人手を加ふるに非ず　心を石に溶かす也　命終ることなし

硯を削るは軀全体の荒行

〈表二の解説〉

法華堂　執金剛神

法華堂本尊背面厨子中に深く秘められている執金剛神像は、法華堂が東大寺の一院となる以前、金鐘寺と云われていた頃から、已に奉安されていた尊像である。

像は約二米余、如何にも忿怒の相貌をあらわし、右手に金剛杵を振りあげ、口を大きく開いて叱咤するの状を現している。そのポーズと云い、徒らに誇張に堕すことなく、精緻極りなき筋肉の動きを表現してあまりある。各部の賦彩を見るに、甲冑には、金箔地に墨描きに依って、亀甲や唐草文をあらわし、衣裳の随所には、丹青とりどりの地に、繧繝彩色によって、宝相華唐草文を施し、全身を装飾している。その顔貌に、頚に、腕に、あらゆる姿態に、気魄、威厳の充溢した姿見るべく、正に天平彫刻の優秀な風格を示している。

由来伝説にゆたかな此尊像は、日本国現報善悪霊異記中巻二十一に依ると、寧楽（ナラ）の昔、東山の金鷲寺に、一人の優婆塞があった。聖武天皇の頃、塑像執金剛神を奉安して、親しく之れを崇めていたが、夜となく、昼となく、その尊像の蹲に縄を着けて、それを引き廻わしながら、念願を籠めていると、或時の事、尊像の蹲から一通の光を発して、その光が宮殿にまで光り輝いた。天皇は驚き怪しんで、使を遣して尋ねて見ると、一優婆塞の念願と分ったので、勅を発して得度を許し、その行者を金鷲菩薩と称した。と云う伝説である。

「東大寺要録」「古事談」等に依ると、この優婆塞が即ち良弁僧正であると伝えている。

又、天慶年中、平将門の乱に際してのこと、尊像の髻を結ぶ紐の右の端が忽ち大きな蜂になって飛び行き、将門を刺し殺したということである。一説には将門の乱が起るや、如何した事か、尊像の姿が消えて見失ったかと思うと、やがて戻って来た所を見ると、全身しっとりと汗にまみれ、髻の紐の端が失われていた。とも伝えられている。

何れも尊像の深遠な趣きと、優れた技法とを語り伝えたものである。

（編）

辰巳会幹事一覧表（○印は支部長）

会長　高畑誠一

本部幹事

今村冬二郎　今村頼吉　小野三郎　大幡久一
小倉五郎　木畑竜治郎　中井義雄　中村勇吉
畑薫　橋本知一郎　福田秀吉　松岡俊一
松下重男　柳田義一　米田幸吉

東京支部幹事

○西川政一　河合一雄　楠本直美　小島実
斉藤斧吉　坂本寿　嶋内義治　鈴木丸衛
田代義雄　安東浄　山成卓爾　石田俊一
山下元徳

中部支部幹事

○秋元鷹男　伊藤庄次　竹下富士松　伏見俊助
藤原長司

四国支部幹事

○東条順吉　小松豊秀　小栗正　上久保秀樹
竹崎浅吉　藤江清治

九州支部幹事

○松本通　小樋井正夫　滝上弁二　西茂
松本得一　森本兎之助　米倉勇

北海道支部幹事

○町田叡光　加地彦太郎　桜庭亥一郎　深谷良一
山口義雄　横田周作　嶋内義治（兼）

1974 盛夏

暑中御見舞

株式会社神戸製鋼所
会長　外島健吉
社長　井上義海

帝人株式会社
社長　大屋晋三

日商岩井株式会社
相談役　西川政一
社長　辻良雄

太陽鉱工株式会社
会長　高畑誠一
社長　鈴木治雄